新田の村

米持を歩く

匝瑳探訪

－64－

稲刈り間近な「干潟八万石」を見渡すと、黄金色に染まった景観が実りの秋を存分に感じさせてくれています。

東西12キロ、南北6キロの広大な湖だった椿海（つばきのうみ）が干拓され、新田18か村の成立は1696年（元禄9年）のことでした。

18か村のうち、春海村と米持（よねもち）村の2か村が市内の地区として所在しています。豊和地区に含まれる米持区は現在の戸数は12軒と少なく、あまり紹介されたことがありませんでした。同区の集落は、米持村と名付けられる前に「飯塚村下椿新田」と呼ばれたように、飯塚区に隣接し干拓のために掘られた馬洗堰（まあらいせき）の下、大利根用水西幹線に沿って家いえが点在しています。

米持という新村名は、当時大寺村に住む八木権右衛門にちなむものだ、とまことしやかに伝わっています。権右衛門は広大な椿新田全体の管理などの仕事をする3人の新田割元（わりもと）名主の1人でした。そして1674年春から干拓された新田が売り出されると最初に、飯塚村長者松下から椿村境までの土地9町歩を買い上げたとされます。このことから「米」の字を「八」と「木」とに分け、「八木の持つ土地」にかこつけて「米持」にしたというのです。

伝承はさておき、1695年の米持村総面積62町歩の田畑を所有する農民は、飯塚村の102人をはじめ近隣村の133人で、江戸の町人もいました。しかし、村内に屋敷を構えたのは1人だけで、それから120年近く経った1814年になっても村の家数4軒、人数18人と記録されるほどでした。

椿新田18か村は、成立して間もない1701年から数年間天候不順による大飢饉（ききん）に見舞われたり、砂地が多く生産性が低いなかで年貢の負担率が高いことなどで新田農民と割元名主との対立が絶えませんでした。これがやがて独立運動へと発展し、各村に名主が置かれたのは1715年のことでした。その後30年ほどして幕府も新田村を一般の村と認めたとされています。

椿海の干拓から350年。新村成立時は約2万石弱で、「干潟八万石には程遠い」との記載・表現も見らますが、「米持」集落から田園風景を見渡すと「八万石」がふさわしいと、改めて感じました。

問 秘書課広報広聴班 ☎73・0080

田園風景から見える米持の家並み